

共感共創学としての風土学の再構築—環境と心性を架橋する人と自然の科学知に向けたグローバル人文学の創成

① ビジョンの概要

グローバル化とデジタル化が急加速する地球環境で「人はどう生きるべきか」という問いに答えるには、新たな個人と世界の関係性を可視化し環境と心性の連環という未開拓の問題に対峙しなければならない。近代科学の根底にある西洋的人文知を、人と自然の共感共創学としてのグローバル人文学による科学知へと繋げ、地球社会のあり方を共に考える空間としての学術と社会のフォーラムを構築し、地球社会を共創する未来予想図を描く。

② ビジョンの内容

現代におけるグローバル化とデジタル化の急加速は、グローバルデジタル環境の出現、個人と地球社会の間の空間域の流動化、既存の価値（在来知や文明的価値）の資源化、社会の様々なアクターの地球社会の構成員化を生じさせている。新たな個人と世界の関係性の可視化には、地域性をミクロな人間の内面性やマクロなグローバル地域との連関で捉える視点を持ち、地球社会での環境と心性の連環という人と自然の相互作用環の根源的かつ包括的理解に係る未開拓の問題に対峙しなければならない。

この問題を考察する前提となる共通認識として、環境と人口をめぐる地球規模の変動では社会や経済が自然や生態と深く関係していること、グローバル化とデジタル化の急加速は地球を狭くさせることに限りがあること、地球社会の持続可能性と個人の幸福の追求は深く関係すること、そして今や地球環境の危機は私たちの心のあり様「心性」の危機となったことが挙げられる。そこからの問題意識として、私たちの考え方や感じ方はどこまで自然環境の影響を受けているのだろうか、その影響は他人との付き合い方・社会の作り方・世界のあり方の点でどこまでどのように及ぶのか、自然環境が異なれば必ず異なるのならばなぜどのように異なるのか、だとすれば地球環境変動はどのような影響を与え、いかにたがいの問題として理解しあえばいいのか、が挙げられる。異なる心性の結びとがどうやって違いをこえて地球社会の共創のために協働できるのかという問いに答えるためには、地域性をミクロな人間の内面性やマクロなグローバル地域との連関で捉える視点が必要となるが、既成の関連分野には方法論的視座がなく、地球社会における環境と心性の連環という未開拓の文理共創的な視座から考える必要がある。

2020年以降のコロナ禍は、地球社会における個人と共同体のつながりを根底から揺るがす現象として、個人の実践が、地域社会や国家システムを超越して地球社会へと直截に影響を与え、地球社会と個人が対峙することになった。人びとの皮膚感覚である「地球社会」の実相を捉える研究が必要であり、そのために「個人」の周囲に「社会」「地域」「世界」を設定し、「個人」を包摂する価値体系としての「文化」「文明」「世界システム」を解明してきた従来の分析モデルに代わる、環境と心性の連環モデルを構築することで、時間的にも空間的にも分野間でも複雑に連関している現代の地球社会の問題を可視化する研究枠組みが求められている。人間が個として自然との相互作用の場で創出する空間、自然資源と文化資源が接続し関与する生活空間、地域性や文明的価値が関与する社会空間やグローバル地域空間の中で、グローバルデジタル環境が生む相互作用環の様相を究明しなければならない。そこでは、社会・経済系と自然・生態系の相互作用を、環境と心性の関係性に係る問題系として整理しなおすことで、情報科学や認知科学、哲学とも協働し、AIやロボット工学への応用を見据える新しい視座から、人新世において「人はどう生きるべきか」という問いに答えることが可能となる。

人間存在自体に環境が内在化していることに無自覚な人文学を再構築することで、近代科学の根底にある西洋的人文知を、人と自然の共感共創学という大きな物語として描きなおすグローバル人文学に基づく科学知の創成へと繋がる。これからの人文学の果たす役割は、地球社会のあり方を共に考える空間としての学術

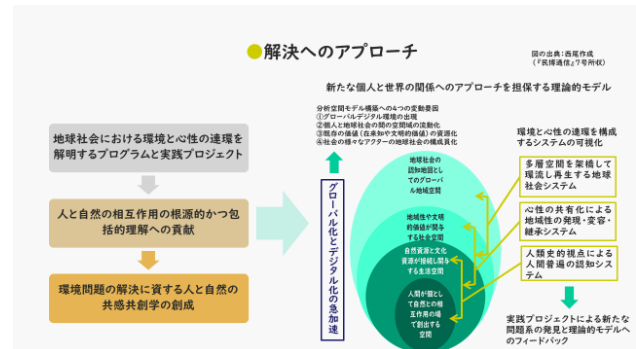


図1 問題の背景とその解決に向けた研究戦略

と社会のフォーラムを構築し、私たちが個人としてどのように地球社会を共創していくのかについての未来予想図を描くことである。

③ 学術研究構想の名称

共感共創学としての風土学の再構築—環境と心性を架橋する人と自然の科学知に向けたグローバル人文学の創成

④ 学術研究構想の概要

環境と心性の連環モデルを構築して、時間的にも空間的にも分野間でも複雑に連関する現代の地球社会の問題を可視化する。人間が個として自然との相互作用の場で創出する空間、自然資源と文化資源が接続し関与する生活空間、地域性や文明的価値が関与する社会空間やグローバル地域空間の中で、グローバルデジタル環境が生む相互作用環の様相を究明する。社会・経済系と自然・生態系の相互作用を、環境と心性の関係性に係る問題系として整理しなおすことで、情報科学や認知科学、哲学とも協働し、AI やロボット工学への応用を見据える新しい視座から、人新世において「人はどう生きるべきか」という問いに答える。

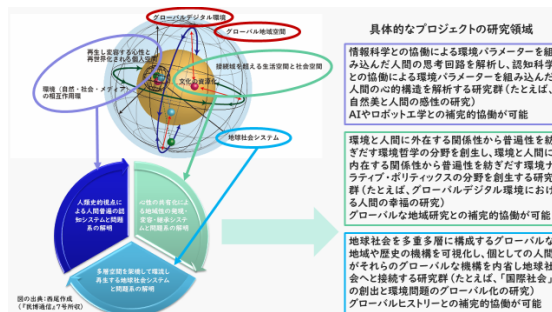


図2 地球社会における環境と心性の連環モデルと具体的なプロジェクトの研究領域

⑤ 学術的な意義

異なる心性の人びとがどうやって違いをこえて地球社会の共創に協働できるかという問いに向けて、既成分野にはない方法論的視座として、従来の文化・文明・世界システムの思考に代わる人間・環境学の視座を提供する。

⑥ 国内外の研究動向と当該構想の位置付け

個人と社会や文化の関係を解明してきたのが文化人類学だが、個人の内面領域を保留してきた点で課題が残る。歴史学は個人の内面領域を社会動態に接合した反面、その発生や変容のプロセスは保留したままである。社会科学である地域研究は人類の普遍性を追求するベクトルと、人類が直面する課題解決を志向するベクトルという両極的展開の中で、自律的な学問領域としての理念が希薄になりつつある。本研究構想は、自然科学系学問との文理共創可能な普遍性を追求し、地域研究の学問的存在意義を問い直す。

⑦ 社会的価値

人と自然の相互作用の根源的かつ包括的理解によって個人の心性に係る嗜好や感性を抱合した視座を提供し、「異なる心性の人びとが、どうやって違いをこえて環境問題に協働できるのか」という問題の解決に貢献できる。

⑧ 実施計画等について

【実施計画】

R6-R7: 共感共創学研究センターを設置し、環境と心性の連環を解明するプログラムのための実践プロジェクトと、その研究拠点を整備する。

R8-R12: 研究拠点ネットワークを整備するとともに、新たな問題系の発見と理論的モデルへのフィードバックを行うことで研究を深化させる。

R13-R15: 新たな個人と世界の関係へアプローチする理論的モデルを構築して、地球環境の問題解決に資する人と自然の共感共創学を創成する。

【所要経費】

総額 3,240,000 千円

【実施機関と実施体制】

新研究領域の国際的卓越拠点として機能させるために国立民族学博物館に共感共創学研究センターを設置し、三つの実践プロジェクトを組織し、各々に一つの中心拠点と四つの共同研究拠点を配置する。

⑨ 連絡先

西尾 哲夫 (人間文化研究機構国立民族学博物館)